

# 京都出土の高麗青磁象嵌枕

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

京都市内の発掘調査では中国製の陶磁器は多く出土するが、高麗青磁が発見されることはきわめてまれである。現在までに数十点が知られているにすぎない。

これらはその少なさゆえに、特別な場合を除いて交易品として扱われたものでなく、相互の交流を通して入手されたと考えられている。

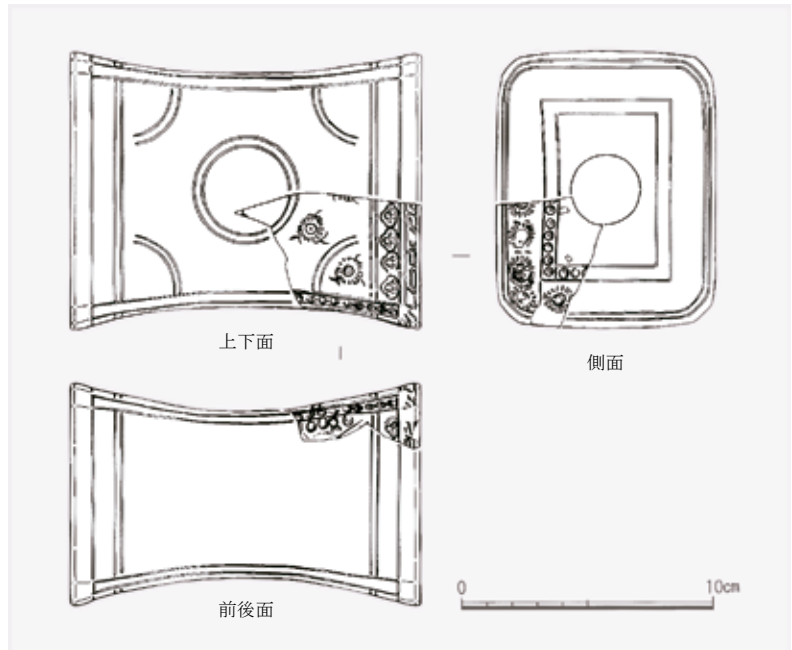
そのなかで注目されるのは、中京区蛸薬師通烏丸東入一連社町(平安京左京四条三坊十五町)の調査で発見された、高麗青磁の枕の破片である。高麗青磁枕は、これまで日本では、福岡県の太宰府跡で2点、福井県の一乗谷朝倉氏遺跡で1点しか出土しておらず、本例が4例目となる。

この破片は、隅の部分三面が残っており、中央に向かって緩やかにカーブを描きながらくびれる、長方形六面体の枕の一部である。つまり頭の形にあわせてカーブがついているわけである。六面とも文様が施されるが、向い合う面には同じ文様を描くのが一般的である。

枕の透かしのある側面は長方形になっており、側面の長い部分を立てた状態で、上あるいは下になる部分を上下面、横になる部分を前後面と呼んでおく。ただし上下面にだけ頭をおくのではなく、前後面も同じように使用されただろ



発見された高麗青磁象嵌枕片



実測にもとづく復元図

うと思われる。側面を長方形にするのは、高さを選択するための工夫であろう。

釉は淡緑灰色をおび、貫入が全面にみられ、内面にも釉薬が施されている。文様は高麗青磁を特徴づける象嵌技法で描かれている。

象嵌技法とは、器の表面が生乾きのうちに、刃の鋭い工具やスタンプ(印花文)で文様を刻み込み、その中に白や黒に発色する土を埋め焼きあげる技法で、画然とした文様をつくりだすことができる。

本例に類似した枕としては高麗



写真1 青磁象嵌枕 高麗美術館蔵

美術館所蔵のもの(写真1)があり、その枕を手がかりにして全体の文様構成をある程度復元することができる。側面は丸い透かしを中心に、外側から界線、菊花文、珠文帯を描く。前後面は側面に雷文、如意頭文をおき、中央の圈線を中心にして四隅に弧線を配し、その隙間を埋めるように菊花文をおいたものと考えられる。この場合、透かし穴の径を2.8cmとすると枕の高さは11.0cm、幅は8.8cmになり、枕の長さは14.0cmになる。上下面は前後面と同様に側面に雷文、如意頭文を描く。その内側には珠文と線文がみられるが復元は難しい。ただ韓国海剛陶磁美術館の青磁枕(写真2)の葡萄文を参考にすれば、珠文の集まりを葡萄の房、線文をその蔓とみることも一案であろう。また、上下面と前後面との境は面取りし、珠文帯をおいている。

この枕は室町時代の層から出土したが、文様ならびに釉の発色などから製作時期は13世紀と考えられる。しかし、その時期がそのまま日本への請来時期とは限らないようである。1320年代、日本に向けて航行中に韓国の新安沖で沈没

したとされる船の荷に、12世紀後半に製作されたと考えられる青磁枕がふくまれているのである。この青磁枕は彼の地で伝世された後に船積みされたと思われる。

いっぽう現在、大阪市立東洋陶磁美術館所蔵の枕(写真3)は、大徳寺伝来のもので、本例と同じく京都につながる青磁枕である。この伝世品は、後世に側面の片方に方形の孔をあけて、花生けに見立てたものである。これは茶道具の中に受け入れられ、現在まで伝世された珍しい例である。

ところで、高麗青磁は高麗においても一般社会にまで普及したものではなく奢侈品であった。なか

でも枕は特注品と推定され、特に限られた人のみが使用できたものであった。日本でもこれを入手できたのは、それに相応する人々であったと考えてよいだろう。

陶枕は、ふつう夏用あるいは午睡用の枕といわれている。たしかに青磁のもつ清涼感、寝苦しい夏や昼下がりのまどろみにふさわしいのかもしれない。往時の人々は異国の枕でどのような夢をみたのだろうか。(高正龍)



写真2 青磁象嵌葡萄枕 海剛陶磁美術館蔵



写真3 青磁双鶴文枕 大阪市立東洋陶磁美術館蔵

西暦		1000	1200	1400
朝鮮	統一新羅	高麗		朝鮮
日本	平安	鎌倉	南北朝	室町

対照略年表